

北陸地方ニ於テ實驗セル「アメーバ赤痢」ニ就テ

金澤醫學專門學校近藤内科教室

藤 邑 左 京

余ハ金澤病院内科二部ニ於テ、大正六年ヨリ今日迄九例ノ「アメーバ赤痢」ヲ實驗シ、其内八例ニ於テ「エメチン療法」ヲ應用セリ。而シテ「エメチン療法」後ノ經過ヲ詳細ニ觀察シ得ザリシハ遺憾ナルモ、未ダ北陸地方ニ於ケル「アメーバ赤痢」ニ關スル報告ヲ聞知セザルヲ以テ聊カ茲ニ報告セントス。

吐根ハ十七世紀ノ終リ頃ヨリ痢病藥トシテ用ヒラレタリシガ、一九一二年 Vedder⁽¹⁾ハ吐根ノ有効成分ナル「エメチン」ガ、「アメーバ」ト強キ親和力ヲ有シ從テ強度ノ撲滅性ヲ有スルコトヲ實驗セリ。此實驗ニ基キ Rogers⁽²⁾ガ始メテ、「アメーバ赤痢」ノ「エメチン療法」ノ臨牀的報告ヲナシテヨリ、以來 Lawson⁽³⁾、Lyons⁽⁴⁾、Baermann u. Heinemann⁽⁵⁾等ニヨリテコレガ有効ナリシ報告相次ギテ起レリ。本邦ニ於キテハ大正二年吉田⁽⁶⁾、田代氏⁽⁷⁾の等ニ依リテ始メテ用ヒラレ、次イデ、稻垣⁽⁸⁾、米永⁽⁹⁾、志村⁽¹⁰⁾、其他ノ諸氏モ、略ボ同様ナル成績ヲ得タリシモ、又一方ニハ其全然無効ニ終レル實驗例ナキニシモアラズ。然レドモ斯クノ如ク「エメチン」注射ニ依リテ、果シテ能ク「アメーバ赤痢」ガ根治セラルカ否カハ疑問ナリ。從來ノ實驗ニヨレバ、「エメチン」ハ大榮養期「アメーバ」ニ強力ニ作用シテ全部又ハ大部分ヲ死滅セシムルモ、其繼續體ナル小榮養期「アメーバ」及ビ嚢子ニハ、影響少キガ如シ。加之「エメチン」注射ニ依リテ、大榮養期「アメーバ」ハ小榮養期「アメーバ」、次ニ嚢子ニ移行シ、從テ急性症ハ所謂慢性症ニ、或ハ潜伏狀態ニ移行シ易キガ如シ。而シテ小榮養期「アメーバ」及ビ嚢子ハ、或ル誘因例之バ過食過勞下痢旅行等ノ不攝生ニ依リ、再ビ大榮養期「アメーバ」トナリ、茲ニ再ビ赤痢症候ヲ發現ス。

「エメチン」ノ使用量ハ、Rogers・Heinemann・吉田・稻垣氏等ニ依レバ、一回量〇・〇二乃至〇・〇五ニシテ全量ハ、實驗者ニヨリ多少ノ差アルモ、多クハ、〇・二乃至〇・六ナリ。

次ギニ「エメチン」ノ副作用ニ就キテハ、Heinemann u. Baermann 等ハ大量ヲ用ユルトキハ、全身違和倦怠食欲不進眩暈ヲ來セルヲ實驗シ、吉田・米永氏等ハ一般ニ副作用ノ輕微ナルコトヲ說ケリ。稻垣氏ハ普通量ヲ長ク持續シテ、數ヶ月ニ亘リ數十回ノ注射ヲ爲シタルニ、再ビ粘血便ヲ排出シ注射ノ中止ニヨリ粘血候ノ漸次恢復セル一例ヲ實驗セリ。

余ハ余ノ實驗セル「アメーバ赤痢」ニ對シ、五%鹽酸エメチン液ヲ第一回ニ、〇・八乃至一・〇第二回ヨリ一・〇ヲ毎日或ハ隔日ニ肩胛間部ニ左右交代ニ皮下ニ注射シ、少キハ二回多キハ十六回ニ及ベリ。其症例ヲ表示セバ左ノ如シ。

氏名	性	年齢	職業	縣別	發病地	粘血便ノ度	有形便ノ日數	ソレニ要セシ「エメチン」量	回注射數	「エメチン」ノ全量	副作用
石田	男	47	農業	石川縣石川郡	滿洲	13	1	0.05	12	0.6	眩暈頭痛
堀地	男	41	農業	富山縣下新川郡	同上	9	2	0.1	12	0.6	同上
谷本	男	28	農業	石川縣江沼郡	同上	3	2	0.095	13	0.645	同上
大江	男	47	農業	富山縣東礪波郡	同上	4	1	0.05	12	0.6	同上
中山	男	27	官吏	石川縣金澤市	朝鮮	3	3	0.1	2	0.1	同上
岡田	男	61	農業	富山縣西礪波郡	同上	2	3	0.15	12	0.6	同上
山田	男	30	船員	石川縣金澤市	香港	7	4	0.145	16	0.795	同上
山本	男	44	農業	福井縣大野郡	同上	11	2	0.1	12	0.6	同上
桑畑	男	32	行商人	富山縣富山市	漢口	5	/	/	/	/	頭痛

以上表示セル處ニ據レバ、九例共ニ男性ニシテ、凡テ二十七歳以上、最高ハ六十一歳ナリキ。職業別ハ農業六人、官吏一人、船員一人、行商一人ニシテ、其内四人ハ朝鮮・漢口・香港・滿洲等ノ「アメーバ赤痢」ノ流行地ト認メラルル地方ニテ發病セリ。其他ノ五名ハ農業ニ従事シ流行地ニ旅行セルコトナク全ク居住地ニ於テ發病セリ。其ノ縣別ハ石川縣一人、福井縣一人、富山縣三人ナリ。由之觀是「アメーバ赤痢」ハ北陸地方ニ於テモ散在性ニ存在スルモノノ如シ。

以上ノ九例共ニ檢便ノ結果定型的ノ大榮養期赤痢「アメーバ」ヲ認メタリ。而シテ「エメチン」注射後多クノ例ニ於テ急速ニ奏効シテ一乃至三回ノ注射ニヨリテ多キハ十數回ノ粘血便ガ變ジテ有形便トナリ、裏急後重腹痛全身症候輕快シテ、患者ハ再生ノ思ヒアリ、且ツ糞便中ニ大榮養期「アメーバ」ハ消失セリ。最近實驗セル石田ノ例ニ於テハ「エメチン」療法後下劑ヲ與ヘ集卵法ヲ用ヒテ小榮養期「アメーバ」及ビ嚢子ノ檢索ニ努メタルモ陰性ナリキ。他ノ七例ハ嚢子及ビ小榮養期「アメーバ」ノ檢索不充分ナリキ。而シテ臨牀的治癒後患者ハ全治セルモノト思ヒ退院セルタメ再發ノ有無ヲ詳細ニ知ルコト能ハザリシハ遺憾ナリ。斯クノ如ク「エメチン」ハ大榮養期「アメーバ」ニ奏効スルコトハ確實ナルモ、現下ノ問題トシテハ如何ニシテ小榮養期「アメーバ」及ビ嚢子ヲ撲滅スルカニアリ。換言スレバ、如何ニシテ一時的治癒後ノ再發ヲ防遏スルカニアルナリ。

最後ニ余ノ實驗ニ於テ副作用ハ一般ニ輕微ニシテ輕度ノ頭痛・眩暈ヲ訴ヘタルモノハ例中二例アリ。又反覆注射セル者ニハ局部ニ硬結・壓痛ヲ殘セリ。

引用書目

- 1) Vedder, Discussion an Dysenterie. Far Eastern Assoc. of Trop. Med. Hyg. 15. X. 1912.
- 2) Rogers, Brit. Med. Journ. June and Aug. 1912.
- 3) Lawson, Brit. Med. Journ. 28. IX. 1912.
- 4) Lyons, Journ. of the Amer. Med. Assoc. April. 1913.
- 5) Baermann u. Heinemann, Munch. Med. Wochenschr. No. 21.-22. 1913.
- 6) 吉田「アメーバ赤痢」ノ「エメチン療法」臺灣醫學會雜誌第百三十八號—第百三十九號。
- 7) 田代「アメーバ赤痢」ノ「エメチン療法」第十九回九州沖繩醫學會雜誌第千九百十三號。
- 8) 稻垣「アメーバ性赤痢治療學」日新醫學、第四年第一號。
- 9) 光永「アメーバ對「エメチン療法」ノ成績ニ就テ、臺灣醫學會雜誌第百三十八號—第百三十九號。
- 10) 志村「アメーバ赤痢」ノ「エメチン注射療、日新醫學第八年第三號。